おわりに

上田：最後に全体を通じての質問、問題提起、あるいはコメントをいただければというふうに思います。

フロア A：このプロジェクトやっていることをアメリカの知人に伝えたいと思っているのですが、海域学は英語でどういうふうに言ったらいいでしょうか？

堀本：海域学というのは、やっぱり日本だけの現象じゃなくて世界的な現象だと思うのです。なので、報告のなかでいい言葉ないかなと思っていろいろ調べてみました。ところがやっぱり面白くない。oceanography とか海洋学はあるのですが、海洋学だとソーシャルな意味が入ってこない。なので、新しい言葉を作るしかないのかなという印象です。

上田：確か濱下先生ですが、geopolitics に対応して、maritime-politics というようなこと、海政学という形で言っています。その辺りから何とかロジーみたいなものをつけるような感じでしょうかね。

太田：地域学は英語で area studies ですよね。この英語名は相当定着していると思うのですが、このエリアがもし地上しか指さないのであれば、これに maritime とかをつけるという考え方もできると思うのですが。この海域学というのは、もちろん海に焦点を当てるわけですけれども、必ずしも対象が海だけになるわけではないですね。

上田：海から陸に対するみたいなことです。

太田：それから、海を生活の拠点にしている人も多くは地上に住んでいます。その海岸地域も対象範囲にも入ってくると思います。

上田：いい質問ですが、ちょっと課題ですね。第 3 年度の最終年度には国際シンポジウムに持っていこうと思っていますので、そうするとやはり英語での発信が求められます。至急議論を積み重ねていきたいと思います。ちょっと宿題にさせていただければというふうに思います。

フロア B：突拍子もない考えですが、例えば、海水が引いて水位がどんどん下がってきたら陸地が増えてきますが、そうした場合その海域学というのはどう変わりますか？恐らく現在の海を巡る国際情勢でも資源や軍事基地などの、国の欲望などが根底にあると思う。そういうものではなく、地球の変動という観点から見たら、固定観念ではなくちょっと変った見方できるのではないかと思いました。陸地が増えればもっと激しく争いも起こるだろうし、それでまた欲望に基づいた境界ができるのではないでしょうか。何かみんな 1 つに固まった考えになっているように見えます。もっと柔らかい考えでいったらいかがかと私は思います。以上です。

上田：なかなか重要な視点だと思いますね。ちょうど日本の沖合（西之島付近）で今、新しい

島ができつつあるという状況もあります。それがどうなるのか。あれは日本の領海に近いところで起きているということで、もう日本の領土みたいに言われている。逆に前から問題になっているのは、温暖化による海面上昇で、陸地が水没してしまうということ。確かユニバーサル映画で、全てが海になってしまったときに人類はどうやって生きるのかを問題にした映画がありましたけれども、ある意味でそういう逆の発想です。全部が海になってしまったときに人類はどのように共存ができるのかという発想もありうるかもしれないです。

フロア B：あるでしょうね。それ、どこに線を引くかだね。

上田：その辺り、今の提言を受けて少しその未来へと言ったときに、その地球温暖化が進んで全てが水没してしまった世界というものをシミュレーションとして想定して議論をするということもありうるかもしれません。どうもありがとうございます。

フロア C：外邦図を使って研究の基礎にするということで、最初に豊田先生のごあいさつのなかで簡単に説明がありましたが、外邦図自体がどのように作られたのか、あるいはその後どういうふうに維持されてきたのか、もうちょっとお話伺いたかったです。

上田先生が用意された資料に、外邦図は「当該海域でヨーロッパ植民地宗主国が作製した地図をものに、日本の陸軍」が作製したとあります。私はこれを拝見するまでは、何となく日本海軍が作成したと思っていたのですが、それは陸軍が作成したということですね。これもちょっと意外で面白かった。

それから、このヨーロッパ宗主国の地図というのは、どういうふうなものをどのように日本軍が利用してきたのかっていうこと。もうすでに何か研究されたものがあれば、そういう文献資料を、教えていただければありがたいと思いますが。

上田：実はこのプロジェクトの中でもその辺りを担当して、研究をしていこうということもあります。ちょっと同時並行的に進めていますけれども、日本の軍政というような視点から外邦図を見て行くということがあると思います。もう 1 つは、まだちょっと手をつけていないのですが、アジア地域研究所には水路図という、海とか河川の水深などを丹念に記録した、まさに海を航行するための水路図というものも収蔵されています。このプロジェクトでは、海路図の整理は大体めどがついて来ましたので、来年度はちょっと水路図の方をどうするのかということをちょっと検討していきたいと思います。そのときにおそらくその水路図の作成というところでは、陸軍ではなく海軍というようなところの問題点なども出てくるかと思いますので、その辺りのところは検討していきたいというふうに思います。

フロア C：ありがとうございました。

上田：それでは閉会のあいさつに移りたいと思います。それぞれの報告者の方、あとコメンテーターの方、皆さんも本当にどうもありがとうございました。

このプロジェクトはこれから 2 年と少し続きまして、2015 年終了という形で展開をしていきます。先ほどあった英語で何と言うかの質問や、あるいは全部が陸としてつながってしまっ

たら、逆に全部海としてなってしまったらどうなるのかというような大胆な発想で、ぜひいろいろ刺激を与えていただければと思います。本当にどうもありがとうございます。

　それでは司会の大橋さん、どうもご苦労様でした。長丁場になりましたけれども、今後ぜひご協力の方、ご支援の方をよろしくお願いして、今回のシンポジウムを終えさせていただきたいと思います。